



田 畑 益 弘

WEB PAGE I

太陽書房

WEB PAGE

目次

1 . 短歌集	5
2 . 俳句集	19
3 . 俳句集	40
4 . 俳句集	50
5 . くらげ《新宿の季》	63
6 . 二〇〇〇年一月	68
7 . 二〇〇〇年二月	90
8 . 二〇〇〇年三月	114
9 . 二〇〇〇年四月	139
10 . 二〇〇〇年五月	163
11 . 二〇〇〇年六月	189

短歌集

閑散たる二十四時間レストランこんな時だけ秋を感じて

疲れたる紙幣の如き掌^てをしたる静かな男きりぎりす売る

黒人悲歌まひるの風に紛れくる曲がってもまがっても裏街

時計屋のすべての時計狂へりき真昼の静かなる多数決

^{めいてい}酩酊せん酩酊せん人と人の間に暗き国境あり

若葉光ゆゑなく憂^うしと思ひをり人間といふ暗闇我は

新聞で朝の日射しに顔覆^{おお}ふ電車の席に罪人のごと

追憶に耽るごと「六十年安保」が語られゐる一億の欺瞞^{ぎまん}

イラクの暴挙支持する民を想ひをり寝苦しき夜の寝返りのたび

「国際貢献」自明のごとく云ふ者の正義に疲る^{よなが}夜長なりけり

「恋死ぬ」といふ古き言葉に懂るる失ひしもの見ゆるこのごろ

マルクス主義は何なりしかと果てしなく反芻^{はんすう}しやまず月のなき夜

病後の息弾ませのぼる塔^えの上に早や青北風^{あおきた}の空はありたり

けふもまた在り甲斐もなき生業^{なりわい}の果て夜霧の駅にたどりつきたり

不況なる会社の地下の用度課の鉄の扉に冬深むかも

砂時計の砂落つる見つつ大マゼラン雲のことなど思ふ

風さへも遊び道具にありし日を語れど虚^{むな}し電腦童子に

ジーンズの袖にひと拭きせし林檎若く貧しき恋にありしよ

帰り来て夜の金魚^えに餌を与ふ水ゆらめきて心ほぐるる

羚羊^{かもしか}の意識する眸^めの涼しさよ吾が見る前に吾を見てみつ

ただ一人生き残りたる世を想ふ俯瞰^{みおろ}す位置に観覧車来て

山頭火にも寅次郎にもなり難し社の屋上に秋の雲見つ

勝ち目なき消耗戦をたたかへる哀しみに似つつ街は灯りぬ

「わたし」とは記憶にすぎず丁寧^{ひとひら}に履歴をしるす一枚の紙

クローンの「わたくし」がもう一人ゐて鏡の中に暮らしてをりぬ

街頭の曲面鏡に歪みつつ鮫鱈^{あんこう}のごと口開く未来^あ

このごろ本を読まなくなったと同僚は云ひて目つむる電車の席に

檻内^{おりぬち}の怒れる狒々^{ヒヒ}を見てをりぬいつか哀しき心となりて

拒む如く誘^{いざな}ふ如く所どころ深き闇あり真夜^{まよ}の都心は

蠅を見て理由もなきに可笑^{おか}しき日漠然と日本を信じてをり

冬海の白き傷もつ貝拾ふ吾が失ひしものの如くに

蒼穹へ去りゆく蝶を見つめをりかつて何かを諦めし眸^めに

いつしかに心和^なぎをり退^ひけ刻の人波のなか歩調合ひつつ

人退けしオフィスにひとり残りをり己^{おの}が實在少し感じて

逢ふべきか逢ふべし告ぐべきか告ぐべし君待てば駅に声反響^{こだま}

皆違ふ^{かお}貌もつことぞあはれなる同じ列車を駅に待ちつつ

端末を叩く^{ただ}直ちに「トモダチ」が電子回路を通りて現れぬ^あ

枷^{かきがた}をしひて剥がしてしまひたる思ひに似つつ電話終へけり

黒と白のあはひの色よ灰色の背広に鎧^{よろ}ひ今朝も出でゆく

「金で買えないものはくだらないもの」とふ少女の言葉何かを撃てる

吾が視野^{よぎ}を過れる鳥は意志もちて哀しきまでに直線を翔ぶ

制服に着替へて^た佇てば鏡中に虚仮^{こけ}の面^{おもて}の人現るる

挑発せる吾が指先に真対ひて羨^{とち}しきまでに螳螂^{とうろう}青し

女性より学びしことのひとつにて淋しい^{とき}刻もふと微笑める

瀕死なる母を想へばいつしかに飯と一緒に^{なみだ}泪 噛みゐる

母逝きて団欒の椅子余れどもそのままに置く誰も座らず

生きながら戒名を貰ふと父が云ふ母逝きてより何を思へる

老い父は二階に上がり花を替へ母の遺骨にもの言ふ今朝も

秋草の花にとまりつとびつして白き小蝶に重さありたり

逝きし母偲びつつ飲む水割りは水に薄るものの仕合はせ

亡き母にもの言ふ如く独りごち父座しぬます夜長なりけり

蕎麦^{そば}殻の枕に軋む搏動を暫し聴きをり心臓^{しん}を病む吾

すでに亡き星の光も交^まじらふべし母逝きし年果つる夜の空

冬の午後孔雀は羽を拡げつつ少なき人を集めてをりぬ

死によりて死への恐れも終るとふ哀しきことを生と思ふも

わが飼へる小鳥の幸不幸など思ふ自由が死のみ意味するとして

冬星の真青き光飽かず見つ孤立無援^しを自が選^しび来て

猫二匹パソコン二台増えたれど母在らぬこと大きなかな

もの言ひて虚しき夜なり反芻せる^{しゅうじ}終二の歌の「戦争は悪だ」

近づきて^{かが}屈みて見たり^か絵硝子の^ら欠け片の如き冬の^し蝶の屍

訪ぬれば^{ちちはは}父母の家 ^{つつが}恙 なく五分遅れて古時計鳴る

何見ても母想ほゆる部屋ゆゑに抽象画など壁に飾りぬ

わが^{しょう}生 の残り時間をふと思ふ移ろひやまぬ秋雲見つつ

^{たぎ}滾つ瀬を流され来たる葉の如く中年といふ^{よど}瀬み愉しむ

皆違ふ結晶体の雪なれど皆融けてゆく定めもつかな

一枚のフロッピーにし収まりぬ書きなぐりたる青春の詩歌

水と水たたかふ如くスクールが海の^{おもて}面 を容赦なく打つ

核よりも恐ろしき武器使はるるアメリカ映画虚構と思へど

いづくへと渡る群れ鳥眠らざる都市の夜空に羽音光れり